



ACADE見IC 特別篇

NEW PRESIDENT OF KYOTO UNIVERSITY

松本 紘
(Hiroshi Matsumoto)

昭和17年11月17日生まれ。昭和40年に京都大学工学部電子工学科を卒業、昭和42年には同大学大学院工学研究科電子工学専攻修了。同超高層電波研究センター長、同宙空電波科学研究センター長、同生存圏研究所長、同副学長兼理事を経て、平成20年10月に同総長に就任する。

はみだし
すてーじ

家に帰りたくてたまりません。

(法・1 雪見きなこ)

私は中国の北京の北の方にある張家口^{ちょうかこう}という町で生まれました。1歳になる前に奈良県の大和郡山市に帰ってきて小さいころを過ごしました。当時、私の家庭は貧乏で、家がなかったので借家住まいをしていました。本が買えなくて母親が人から借りてきて、手で書き写して私に読み聞かせていました。だからこの本は母親の教育熱心の象徴のようなものです。

そのころ小学校は田舎でしたから、宿題で「きせつだより」を書かされて、毎日自然観察をさせられました。外に出て小川のまわりにある植物や動物を見てまわっていました。そのころから観察は細かくしていますね。自然と身についたん

ではないでしょうか。

中学校も田舎にありました。勉強はそこそこできたと思います。覚えているのは母親が「勉強せなあかん！」と言って勉強させられたことです。ただし試験の前だけです。それで、1点でも引かれたら怒っていましたね。だから私は100点の答案以外持って帰りませんでした。でもほとんど100点でしたけどね。

高校に上がるとき、奈良女子大学付属高校という国立の高校がありました。授業料に関しても、特別奨学生というものがあということで、そこならば経済的に行けるかな、と思い進学しました。

高校を卒業するとき、とにかく就職

しないと家もちませんでした。しかし、就職するなら大学に行ったほうがいいと言う先生がいたので、京都なら通えますと答えました。それで京大を受けることにしたんです。そのときに、絶対に就職できるということで工学部にしました。

たまたま私の2、3年上から電子工学科というのができて、花形でした。そこが35人だけとるというんです。すごく競争が激しくて、医学部より難しかったと思います。絶対に大学に行きたいと思っていたわけではなかったで、どうせ受けるなら、そこなら面白いんじゃないかと受けました。それで通ったんです。

1、2回生のときには心理学や言語学、

01 BACKGROUND

論理学、憲法など、文科系の学科が大好きで、たくさん受講しましたね。語学は英語とドイツ語で、どちらも面白かったです。英語はたぶん私たちの業界では私が一番うまいと思いますね。

4回生の卒論を選ぶときに、当時コンピューター（電子計算機）というが出てきて、かっこいいし、ということで35人中11人が電子計算機の研究室に入りました。私はソフトウェアをやらされました。

当時電子工学をやっていて、私は首席だったので、試験なしで大学院にいけるよ、とささやかれたんです。私は就職しなかったんですが、あ、大学院に進めるのか、と思いました。それが間違いのもだったんですね。

そのあと修論は何をやるかと思って、マイクロ波より波長の長いミリ波をやろうと、その先生の教授室に行きました。でも先生は4月からアメリカに行って、君の修士2年のうち1年半はいないよと言われたんです。それでやめまうと言いました。困ってしまって、教わりたい先生はいないし、教授室から出て隣の教授室に何もわからずに入ったんです。そのときに右の部屋に入って前田先生に

会ったんです。聞いてみると、電気の先生ではなく宇宙の先生だったんです。それが私の宇宙科学の入り口ですね。

その前田研究室と親戚の大林研究室というのがありました。私は前田研の学生だったんですが、大林先生に呼ばれて行ってみると、毎週10篇ほどの論文を渡されて読まされました。

その先生は授業も面白く、試験も傑作でした。4回生のときには、教室にやってきて黒板に丸と点だけをびゅっと書くんです。「この点は電子だ！ 私が今電子を持っている。さあ放すぞ、このあとの電子の挙動を書け！」と言うんです。想像力と物理の知識、哲学的な考え方がないと書けないですよ。修士のときは、試験はもっと面白くて、「問題は自分で考えろ！」と言われました。

その先生に私はロケット実験や衛星実験に連れて行ってもら

いましたね。彼は日本のそういう時代のリーダーだったんですね。すごく影響を受けました。

2年目の10月ころに前田先生に呼ばれて、「大学で人工衛星をあげることにになったから、手伝いなさい」と言われました。それでドクターコースに行かずに無理やり助手にさせられ、7年ほど日立や東芝に通って人工衛星を作っていたんです。



はみだし
すてーじ

授業サボって実家帰ります。

(工・1 shigmax)

工学部を出てやってきたのはプラズマ物理学ですね。なかでも非線形プラズマ物理学は大変難しい問題で、私たちの時代のファッションだったので、1年に何十万という論文が出るわけですよ。私は論文を読むのが嫌いなので、自分の好きなようにやろうということでやっていました。

私は理論だけではわかった気がしないんですよ。実験をやろうとロケット実験

をやったこともありますし、ロケットで電離層を測るだけでは1点の観測しかできないと思って、地上でプラズマを作ったり、スーパーコンピューターを使ったシミュレーションもやりました。

コンピューターは当時遅かったんですが、私はきっと将来速くなると思いました。できるだけ近似をおかずに解けば、実験と同じようにデータが出てくる。それをシミュレーションと称してやろうと、

32、3歳のころに決心をしました。世界中の人に話しかけてシミュレーションの流れを作ろうと、「国際宇宙シミュレーション学校」(ISSS) というものを作り、大林先生やジャン・ドランというフランスの先生を担ぎあげて、実際の運営は私たちで始めました。

世界中から学生を集めて、近似法の問題点、ソフトウェアの穴、物理学とを全部いっぺんに教え、実際にプログラムさ

ないんですが、何が電子を加速させているのかが当時の論争になっていたんです。私は電磁流体波で加速できると思い、計算していました。

NASAから帰るときに、「宇宙太陽発電所 (SPS^{編注})」というのを研究している人がいると論文で知りました。書面調査のために段ボール箱に6つくらいの論文が出ていましたね。ところが日本に帰ってくると、アメリカのほうで研究が止まってしまいました。それでSPSの研究をする人がいなくなっちゃったんです。これは大変面白いのに、と私は悲しく思いました。それで、よし、私がやってみようと思えました。電力を電波で送れると論文に書いてある。それなら一度やってみよう。マイクロ波はプラズマにぶつかると、違う電磁波を出して損失していくんですね。そのプロセスを理論予測して、計算シミュレーションをしました。ロケットで初めて電力転送実験をやったときは新聞やテレビで出ましたね。残念ながら私は今そっちにはタッチできませんが。

編注

SPS : Solar Power Stationの略称。太陽電池パネルを持つ衛星を静止衛星軌道の上に打ち上げ、マイクロ波でエネルギーを送る計画がある。

(工・1 ディフェンスに定評のある池上)

03 ABOUT WORKS

宇宙の仕事をしていると地球が見えてくるんですね。これから人類は大変だと思い、知識人ももっと地球全体のことを考えないといけないのではないかなと思って生存圏研究所を作ったんです。若い人が上の教授や准教授と違ったことをやりたいと言ったときにできる仕組みが必要だろうと思い、テーマを「生存圏」と非常に広い範囲にしました。そして選挙の結果、私が初代の所長に選ばれてしまいました。

そのあと、私は定年を迎えたんです。企業から声がかかったのですが、そのときに前の尾池総長が理事で財務をみてくれと言ってきたんです。研究もやりたければ研究もやれ、と言われました。そう

したら情報も、産学連携も、総合技術も、宇治の担当もやれと、6つも仕事をもらいました。私は頼まれたら断るのが嫌いなタイプなのでやらせてもらいました。

そして総長の選挙になって、私が選ばれたんです。今までは医学部、工学部、農学部の大きな組織から総長が出て、尾池前総長は例外的に理学部から総長になった人でした。時代が変わって、「時代にマッチした人を選ぶ」という空気が大学の中にも広がったんじゃないかと思います。これは私が財務担当理事や研究担当理事としてやったこ



とがみなさんの目にとまって、それでもいいんじゃないかと思った人が多かったんじゃないですか？ 多少頑張る人でないと、こけていきますからね。私は付託を受けたらやらざるを得ないと思いましたね。

04 MESSAGE

京大の特色はというと、昔から言われている「自由の学風」という一言で片付けることもできますが、その本質を見極めないといけません。自由というのは自分がいろいろな発想をして、自分で自分を大切に、個人が光ること。個人が組織に縛られずに自由な発想でできること。京大の特色は、そういう人が多いということです。

また、それを互いが認め合っている。これは大きいですよ。君たちも若いころは、自分がそういう能力を持っているとはとても思えないでしょう。でも年長者から見ると、ここにいる学生は全員が金の卵なんですよ。

すべての人が個性があって、確立していて、素晴らしい人たちの集団にいるという自覚をする。これが大事。そういう人の中で育つということは、自分自身が自分の鍛えること。「己の中にあるものに^{たの}恃むべし」という言葉があるんです。自分の中にいる自分、これに頼らないと

いけないという基本的な考え方を身につけてほしいと思います。

もちろん、利己主義になれと言ってはいるわけではありません。自己が確立していなければ他人は助けられないし、人とディベートできない。確立するまでできないというのではなくて、確立するために人といろいろ対話する、人がやっていることを見る、場合によっては人と衝突する、それを全部吸い取って自分の糧としてもらいたいと思っています。

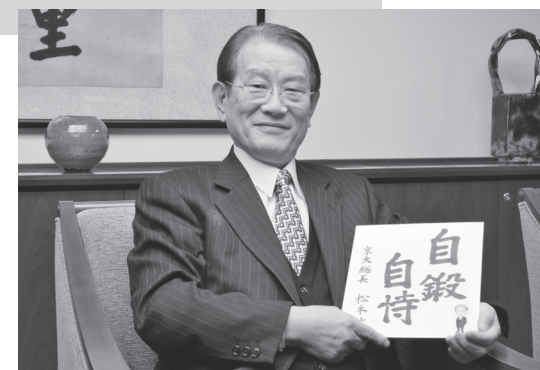
だからプレゼント用に色紙に何か書けと言われて困ったんですが、「^{じたんじ}自鍛自恃」と書きました。自らを鍛え、自らに恃む。「恃」はたのむ、という字です。よくある「頼む」は人に仕事やすべてを任せるという意味ですが、この「恃む」は自分で自信を持ってやるという意味です。

みなさんに言いたいことは、自分を鍛えるというのは大変重要なことです。鍛えるといっても体だけではなく。私は全人教育というのが重要だと思って

います。いろんなことを勉強してもらいたいんです。

読者プレゼント

らいふすてーじを読んで読者カードを出してくださった方から抽選で2名の方に総長の色紙をプレゼント！ 発表は発送をもってかえさせていただきます。



——ありがとうございました。

(教・院 ひよこのこ)

はみだし
すてーじ

冬眠します。

はみだし
すてーじ

ねむい…。